和's YAMATO（わずやまと）

2026
夏号

豊臣秀長　秀吉の活躍を影で支えた知将

- 苦戦の末、一向一揆を制圧
- 秀長の戦略が奏功した但馬侵攻
- 長期戦を制し、播磨を平定
- 鳥取城包囲戦（鳥取の渇え殺し）
- 高松城包囲戦（高松城の水攻め）
- 本能寺の変と中国大返し
- 山崎の戦い　光秀を追い詰めた秀長
- 郷土史跡めぐり　東宮遺跡（群馬県吾妻郡長野原町）
- 群馬の芸術家　河内世紀一
- YAMATO TOPICS　埼玉西武ライオンズ・ベルーナドームにヤマトの社名看板を掲示
- 写真で楽しむ美しい自然　「レンゲツツジ咲く　赤城新坂平」

「朝露のはじく」キショウブとシオカラトンボ　須藤和之 画

写真で楽しむ 美しい自然

『レンゲツツジ咲く　赤城新坂平』

《撮影》藤重朋紀氏 プロフィール

1952年 群馬県利根郡みなかみ町生まれ
1971年 群馬県渋川高等学校卒業
1973年 東京写真専門学校中退
1979年 コマーシャルフォトスタジオ創美社入社
1980年 会社の休日を利用しながら県内の「風景」や「民俗芸能」「画家とアトリエ」など撮り始める。
2001年 フリー
2010年 写真集「上州路·一本桜」
2011年 写真集「上州路」
2014年 上州（群馬県）から見える「富士山」をテーマに写真撮影を始める。
2026年 今まで撮影してきた写真を各テーマごとにまとめ写真展として発表する予定。

表紙の絵
「朝露のはじく」キショウブとシオカラトンボ《F6号》

須藤 和之 プロフィール

Kazuyuki Sutoh Profile

1981年 群馬県前橋市生まれ
2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業　2007年 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻 保存修復日本画修了　2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得　博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞 個展（画廊翠巒）（同2011～25）　2011年 中央電機商会カレンダー原画（2011～25）　2013年 アーツ前橋開館記念展出品、群馬銀行創立80周年記念収蔵作品制作　2014年 個展（日本橋三越本店）（同2017,20,23）
2017年 群馬県展 県知事賞　2016年 個展（株式会社ヤマト）
2019年 高崎市タワー美術館トップランナーIII出品　2020年 上毛芸術文化賞受賞　2022年 個展（株式会社ヤマト）
2023年 群馬銀行創立90周年記念 収蔵作品制作　現在 日本美術院院友 群馬県美術会理事　慶應義塾大学非常勤講師(2013～26)
OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET　URL http://sutooo.net/

和's YAMATO わずやまと
2026年夏号（第69号）

《和's YAMATOの由来》 ヤマトの漢字の「和」、Water & Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。

和'sYAMATO夏号　2026年（令和8年）6月発行
発行：株式会社ヤマト広報室　群馬県前橋市古市町118　TEL.027-290-1891　FAX.027-290-1896

建設プロダクト ヤマト
【発行】株式会社ヤマト　〒371-0844 群馬県前橋市古市町118　TEL：027-290-1800（代）　FAX：027-290-1896
支　　店／東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北　営業所／軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、青森
附属施設／大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター
ヤマトホームページ　https://www.yamato-se.co.jp/

豊臣秀長

秀吉の活躍を影で支えた知将

豊臣秀吉は織田信長に仕え、信長の後継者として天下統一を果たすが、秀吉を支える大きな存在として、弟の秀長の存在があり、軍事と政務の両面から兄の秀吉を支えた。合戦の際、秀長は副将格として軍列に加わり、戦後処理にあたっては、秀吉の補佐役としての能力を存分に発揮した。豊臣兄弟の力の結束が、天下統一という大事業を成しえたといえるだろう。

苦戦の末、一向一揆を制圧

伊勢長島一向一揆は、織田信長にとって「生涯最大の苦戦」の一つといわれるほど、凄惨かつ激しい抵抗に見舞われた戦いだった。この一揆は単なる宗徒と権力者の衝突ではなく、政治・経済・軍事が複雑に絡み合った「反信長ネットワーク」の拠点として機能していたことが、事態を複雑にしていた。

長島（現在の三重県桑名市）は、木曽三川（木曽川・長良川・揖斐川）の河口に位置する広大なデルタ地帯で、網目状の川と湿地に囲まれ、大型船の侵入が難しく、守り易く攻めにくい「天然の泥沼要塞」ともいえる場所だった。

また、この地域は、一向宗（浄土真宗）の強力な信仰のコミュニティが形成され、農民だけでなく地元の国人衆（小領主）も門徒となり、さらに、信長と敵対していた石山本願寺（顕如）とも呼応し、宗教的な結びつきが強固な土地柄だった。さらに、永禄年間（1560年代）には信長が伊勢国の支配を確立するために、長島方面に軍勢を差し向け圧迫したため、既得権益を守ろうとする地元勢力の不満が充満していた。

信長は合計3回長島を攻めており、1回目の元亀2年（1571）、2回目の天正元年（1573）は一揆勢の反撃で、織田軍に甚大な被害が出ていた。3回目の天正2年（1574）は最終決戦となり、秀長は秀吉の補佐役として重要な役割を果たした。

秀長は秀吉軍の主力として、一揆側の重要拠点であった大鳥居城や長島城への包囲戦に加わり、前線で指揮した。また、秀長は秀吉と共に、一揆勢が保有する機動力のある小舟に対抗するため、周辺の川並衆（川の物流を支配する勢力）を味方に引き入れ、輸送路の確保と水上封鎖も指揮した。さらに、敵の逃げ場を失わせるために幾重もの柵（さく）や堀を構築し、水陸両面から2万人の大軍で包囲した。一揆勢を完全に孤立させる「干殺し」の作戦を実務面で支えたのだ。この結果、一揆勢は柵の中に追い込まれ、兵糧攻めの末に火を放たれて皆殺しとなり、ようやく長島一向一揆は収束した。

秀長は、作戦上必要となる堀や柵の構築にあたり、現地の土豪との交渉や兵糧の確保など、織田軍の軍事行動を裏で支える役割を担い、勝利に貢献した。

「天空の城」と呼ばれる竹田城跡と雲海
兵庫県朝来市和田山町

竹田城跡
竹田城跡の標高は353.7m。現在は石垣が残っている。

秀長の戦略が奏功した但馬侵攻

天正5年（1577）の但馬侵攻は、織田信長による「中国攻め（毛利討伐）」の重要な戦いだった。当時、信長は中国地方の覇者・毛利氏と敵対していた。但馬は、信長の拠点である京・近江と、毛利領の境界に位置しており、戦略的な要衝だった。この地を制圧することで、毛利軍の東進を阻むとともに、山陰道からの侵攻ルートを確保する狙いがあった。それに加え、但馬には、当時日本屈指の産出量を誇った生野（いくの）銀山があったため、信長はこの豊かな資金源を直接掌握し、織田軍の戦費に充てようと考えた。

秀長は侵攻の最初に圧倒的な武力を見せることで、敵に抵抗は難しいことを知らしめた。播磨から但馬への入り口にあたる竹田城をわずか数日で陥落させ、さらに敵対する守護・山名氏の本拠である有子山城も短期間で制圧した。険しい山道を踏破し、一気に攻め落とした手際は、信長からも高く評価された。抵抗を続ける拠点を迅速に、かつ圧倒的な軍事力で叩き潰すことで、周囲の国人衆に「織田・羽柴軍に逆らえば、名門の山名氏ですらひとたまりもない」という恐怖と現実を突きつけた。これにより、名門・山名氏は事実上没落し、織田による但馬支配が決定的となった。

圧倒的な力を見せつけた後、秀長はすぐに「許しと共存」のカードを切った。但馬には、垣屋（かきや）氏や太田垣（おおたがき）氏といった、地元に深く根を張った有力な一族がいた。秀長は彼らを皆殺しにするのではなく、「降伏すれば本領を安堵する（領地を保証する）」という条件を提示し、次々と味方に引き入れた。土地の地理や慣習に詳しい彼らを配下に組み込むことで、戦後の統治をスムーズにした。これにより、一揆などの反乱リスクを劇的に抑え込むことができた。

秀長の戦略が秀逸だった点は、武力や政治だけでなく、「経済」を交渉の材料にしたことである。生野銀山の経営に際しては、銀山の周辺住民や人夫に対して、武力による略奪を厳禁し、逆に保護を約束した。「織田の傘下に入れば、治安が安定し、銀の流通による恩恵も受けられる」というビジョンを提示し、単なる征服者としてではなく、「新しい秩序の構築者」として位置付けることで、人心を掌握した。

秀長が但馬で見せた「武力と交渉の使い分け」は、まさに後の豊臣政権の安定を支える「調整役・秀長」の真骨頂ともいえるものだった。

信長は、反抗する勢力を軍事力で圧倒したが、それとは対照的に、秀長は「最小限の流血で最大限の果実（領土と資源）を得る」という極めて合理的な手法を採った。派手に戦功を立てる兄に対し、秀長は「占領地の安定」という実務を担っていた。信長のような苛烈さを持たず、相手の立場を尊重しながら落とし所を見つけるのが秀長個人の性格でもあった。これは後に「秀長がいれば豊臣政権は安泰だった」と評される理由の一つと考えられる。

長期戦を制し、播磨を平定

天正6年（1578）から約2年間にわたって繰り広げられた播磨の三木合戦（三木城攻略）は、秀吉の代名詞ともいえる「干殺し（ひごろし）」が初めて大規模に行われた戦いである。

この戦いにおいて、秀長は秀吉の右腕として、単なる武将の枠を超えた「包囲網の設計者」及び「封鎖の責任者」として極めて重要な役割を果たした。

天正6年（1578）から秀吉は中国地方の攻略に着手するが、播磨の別所長治の離反により、秀吉の中国攻めに暗雲が立ち込める。別所氏は従来、織田方に協力していたが、突如として離反し、毛利氏に加担した。その原因は、織田家内での待遇への不満や、毛利氏という巨大勢力への期待、また「成り上がり」である秀吉の風下に立つことへの抵抗感があったと考えられる。播磨の要衝である三木城が敵に回ったことで、秀吉の中国攻めは極めて危険な状態に陥った。

三木城は堅牢な要塞であり、力攻めでは大きな犠牲が出ることが予想された。そこで秀吉が選んだのが、城を封鎖して食糧を絶つ「三木の干殺し」だった。

秀長はこの長期戦において、主に「封鎖の完成」と「敵方の孤立促進」を担当した。城の周囲に数十箇所もの砦（付城つけじろ）を築き、アリの這い出る隙間もないほどの包囲網を形成した。三木城への食糧補給は、毛利水軍が瀬戸内海から揚陸し、密輸ルートを通って行われていた。秀長はこのルートの特定と寸断を指揮した。天正7年（1579）には、丹生山（たんじょうさん）などの周辺拠点を次々と制圧し、毛利からの救援物資が三木城に届く経路を完全に断ち切る。

付城による、広大な包囲網を維持するには、膨大な数の兵士と食糧、そして各付城の連携が必要となる。秀長は兵站（へいたん）・食料などの補給を担う後方部隊）の責任者として、長期戦に耐えうる体制を整え、城内に籠る敵兵の戦意が削がれるのをじっと待った。秀長は、三木城に協力する周辺の寺社や土豪に対し、「これ以上別所を助ければ、将来の保証はない」という現実的な交渉を行い、敵の孤立を深めた。彼の「温和だが理詰めの交渉」は、戦わずして敵の戦意を削ぐ大きな武器となった。

天正8年（1580）、飢餓が極限に達した三木城は、城主・別所長治一族の自害により、開城した。この勝利により、秀吉は播磨を完全に平定した。信長も、この難攻不落の城を巨大な包囲網の構築と補給路の遮断によって落とした秀吉・秀長兄弟の功績を高く評価した。

秀吉が「光」として前線で派手なパフォーマンスや軍事指揮を行う一方で、秀長は「影」として、地味ながらも失敗が許されない「包囲網の物理的な維持」を完璧にこなした。もし秀長による徹底した封鎖がなければ、毛利の援軍や物資が城内に届き、三木合戦はさらに数年長引いていたか、あるいは織田軍が敗退していた可能性すらあった。

高松城水攻め史跡公園【岡山県岡山市北区】
写真提供:岡山県観光連盟

清水長左衛門宗治【落合芳幾 画】
東京都立中央図書館蔵

鳥取城包囲戦（鳥取の渇え殺し）

因幡国（鳥取県）の要衝・鳥取城は毛利方の吉川経家が守っていた。秀吉は、力攻めによる自軍の消耗を避けるため、城とその周辺を完全に孤立させる戦略を採った。

天正9年（1581）、秀長は、三木合戦での経験を活かし、鳥取城を囲む「巨大な監獄」作りに着手した。まず、鳥取城の背後にあり、補給拠点となっている雁金山城を攻め落とし、毛利軍からの海路経由の支援を物理的に断ち切った。また、若狭の商人らを使って、因幡周辺の米を相場の数倍という高値で買い占めた。包囲が始まると、城内には一粒の蓄えもない状態に陥ったという。

さらに、城からの脱走兵さえ許さない徹底した監視体制を構築した。これにより、城内は外界と接触できない状態となり、わずか4ヶ月で開城に追い込まれた。

高松城包囲戦（高松城の水攻め）

天正10年（1582）、信長の中国制覇の最終段階として行われた、前代未聞の土木戦が高松城包囲戦（高松城の水攻め）である。

中国地方で勢力を保っていた毛利氏は、備中（岡山県）へ進出した織田軍に対し、清水宗治が守る高松城を防御の最前線とした。この城は周囲を深い沼地に囲まれた「泥沼の城」であり、歩兵も騎馬も近づけない天然の要塞だった。秀吉は、城を攻めるのではなく、城の周りに全長4kmに及ぶ堤防を築き、城の近くを流れる川の水を流し込んで、城を水没させるという奇策を発想する。秀長は、堤防工事の全般を取り仕切り、近隣の農民や人夫を集め、破格の報酬を支払うことを約束し、数千人規模の労力を効率的に使い、巨大な堤防をわずか12日間で完成させることができた。堤防建設中、毛利方の主力軍である毛利輝元・小早川隆景・吉川元春が救援に駆けつけたが、秀長軍はこれらの大軍を威圧し、堤防を防御した。

秀吉が天才的な発想で軍略を示し、秀長がその策を実行する。この兄弟の連携こそが、難攻不落の城を無力化した最大の武器となった。

清水宗治自刃の地【岡山県岡山市北区 妙玄寺境内】
写真提供:岡山県観光連盟

本能寺の変と中国大返し

天正10年（1582）6月2日、織田信長が明智光秀に討たれる本能寺の変が勃発した。この時、備中高松城攻略の最前線にいた秀長は、兄・秀吉の「天下取り」を決定づけるために、まさに不眠不休で軍事作戦の遂行と外交を展開した。

信長の死を知った秀吉陣営において、秀長は「毛利に悟られずに和睦を成立させる」という極めて困難な任務にあたった。秀長は軍内の動揺を抑えるとともに、毛利方への情報漏洩を防ぐため、陣を固めて警戒を強めた。天正10年6月4日、高松城主・清水宗治は自分の命と引き換えに、城内にいる兵士の助命を秀吉に嘆願した。

秀吉はその和睦条件を承諾し、宗治は切腹することとなった。秀長は切腹の儀式が滞りなく行われるように、現場を統制した。和睦成立後、秀吉が撤退を開始する際、秀長は殿（しんがり）に近い位置で軍を指揮し、毛利軍が追撃してこないよう威圧し続けた。

和睦が成立した際、毛利側からは「羽柴側からも人質を出すべきだ」という要求があり、本来なら秀吉の近親者を差し出す局面でありながら、秀吉本人は一刻も早く京へ向かいたいため、調整することが難しかった。そこで秀長は、自らの家臣や信頼の厚い者を人質として毛利陣営に送り込む手配を即座に整えた。

もし毛利氏が信長の死を知れば、即座に背後から襲いかかってくる恐れがあった。秀長は撤退の間際まで、あたかも「これから織田の大軍が合流する」かのような軍装を整え、毛利側に「追撃すれば返り討ちにあう」と思わせ続けることができた。秀長が毛利の動きを完全に封じ込めたからこそ、秀吉軍は約10日間という並外れた速さで京へと駆け抜ける（中国大返し）。

中国大返しの途上、姫路城に戻った秀吉は、城内に蓄えていた金銀・兵糧をすべて将兵に分け与えた。この「全財産を投げ打って士気を高める」という伝説的な演出を、現場で混乱なく実行したのが秀長だった。

約3万人の兵が移動する中で、不公平感が出れば軍は空中分解する。秀長は金銀の分配だけでなく、「ここから先の強行軍で、どの部隊がいつ、どこで食事を摂るか」という兵站スケジュールを緻密に管理した。また、興奮状態にある将兵に対し、「これは恩賞ではなく、光秀を討つための軍資金である」という大義名分を徹底させ、略奪や脱走を防いだ。

姫路城
【兵庫県姫路市本町】

山崎の戦い 光秀を追い詰めた秀長

天正10年6月13日、明智光秀との決戦（山崎の戦い）において、秀長は秀吉の補佐役として、重要な役割を果たした。山崎の戦いの主戦場は、淀川と天王山に挟まれた狭い土地で、秀長は黒田官兵衛らとともに明智軍と対峙し、明智軍の進撃を食い止め、秀吉軍の戦線が崩れるのを防ぐ役割を担った。また、勝敗を分けたのは天王山の占拠であり、天王山をめぐって激戦が繰り広げられる中、秀長の本隊は明智軍の側面を突く形で圧力を強めた。秀長の本隊が天王山のすそ野で明智軍の進出を阻止して押し込んだことが、明智軍の戦列を崩壊させる決定打となり、秀吉軍は天王山を占拠する。明智軍は継戦能力を失い、敗走を余儀なくされた。

中国大返しという撤退は、秀長の緻密な管理、運営が伴わなければ、「ただの敗走」に見えたかもしれない。彼が冷静に外交と兵站を処理し続けたからこそ、それは「歴史的な大進撃」という物語になり、山崎の戦いでの勝利を呼び込むことにつながった。本能寺の変直後の混乱期に、もし秀長が不在であったなら、毛利軍の追撃や秀吉軍の離散により、秀吉の天下取りはここで潰えていた可能性が高かったと考えられる。

秀長の幼名は小竹。通称は小一郎。おもな官位は権大納言・美濃守。大和大納言とも呼ばれた。秀長は天正12年に「秀長」に改名し、それ以前は「長秀」と名乗っていた。混乱を避けるため、本稿では秀長に統一して表記した。

主要参考文献：「日本史の中の兄弟たち」安藤優一郎著

文：木下直也

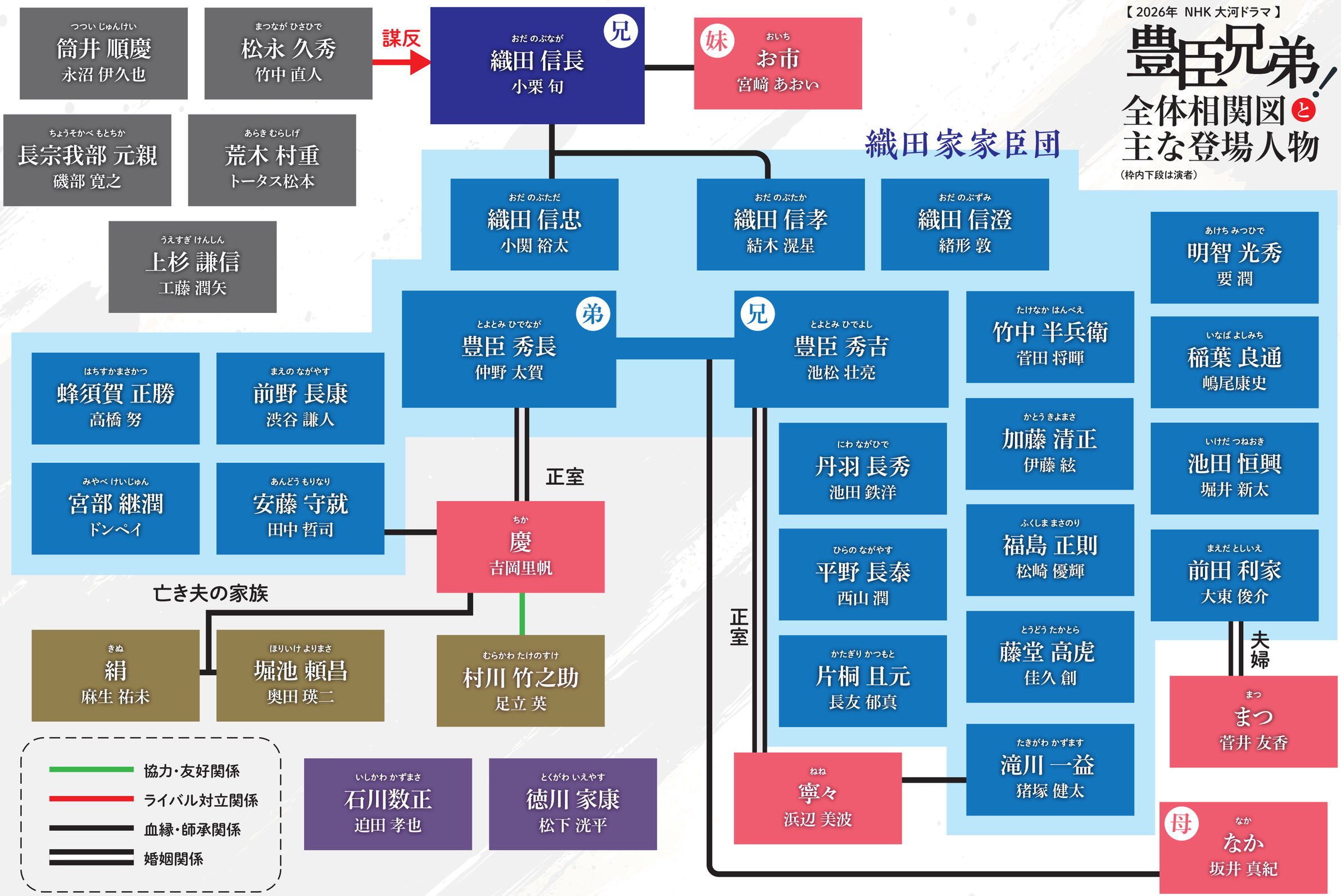
豊臣秀吉・秀長 関係年表

天正元年（1573）	9月	秀吉、信長から浅井家の旧領北近江三郡を与えられ、長浜城主となる
天正2年（1574）	7月	秀長、信長の第三次伊勢長島一向一揆攻略戦に従軍
天正3年（1575）	5月	秀吉、長篠の戦いに従軍
天正5年（1577）	10月	秀長、但馬侵攻の大将を務める
天正6年（1578）	3月	秀吉、三木城の攻略を開始
天正8年（1580）	1月	三木城城主・別所長治が降伏し切腹
	4～5月	秀吉、播磨・但馬両国を平定
天正9年（1581）	10月	秀吉、鳥取城を兵糧攻めし降伏させる
天正10年（1582）	3月	秀吉、備中に進軍し、秀長も従軍。高松城を包囲
	6月	本能寺の変。秀吉、山崎の合戦で明智光秀を破る
		清須会議の結果、秀吉の領土拡大
		秀長、丹波福知山を拝領
		秀長、嫡男・与一郎を亡くし、丹羽長秀三男・千丸（のちの藤堂高吉）を養子とする
天正11年（1583）	4月	秀吉、賤ヶ岳の戦いで柴田勝家に勝利
	5月	秀吉が織田家諸将の領国分配・転封を行い、秀長は播磨・但馬の二ヶ国を拝領
天正12年（1584）	11月	秀吉、小牧・長久手の戦いののち、徳川家康、織田信雄と和睦
		秀長、「長秀」から「秀長」に改名
		秀吉、従三位・権大納言となる
天正13年（1585）	3月	秀吉、正二位・内大臣に昇進し初参内
		秀長、紀州征伐ののち紀伊・和泉を拝領
	6月	秀長、総大将として四国に出陣
	7月	秀吉、従一位・関白となる
	閏8月	秀長、大和を拝領し郡山城に入る
	9月	秀吉、豊臣への改姓を許可される（諸説あり）
	10月	秀長、参議・近衛中将になり参内
天正14年（1586）	5月	秀吉・秀長の妹・朝日姫（南明院殿）が家康に輿入れ
	11月	秀長、正三位・権中納言となる
天正15年（1587）	5月	秀吉・秀長、九州へ出陣し、島津氏を降伏させる
	8月	秀長、従二位・権大納言となる
	9月	秀吉の政庁兼邸宅の聚楽第が完成
天正16年（1588）	1月	秀長、羽柴鍋丸（秀保）を養嗣子（ようゆうし・跡継ぎの養子）に迎え、養子・千丸と離縁
	7～9月	毛利輝元、小早川隆景、吉川広家が上洛して秀吉に出仕、秀長が接待
	12月	秀長家臣の吉川平介が横領の罪で秀吉により処刑される
天正17年（1589）	5月	淀城にて秀吉の嫡男・棄（鶴松）が誕生
天正18年（1590）	3～8月	秀吉、北条氏征伐に出陣し、天下統一を達成
天正19年（1591）	1月	秀長、長女と養嗣子・秀保の婚儀を行う
		秀長が大和郡山城にて死去
	2月	千利休が秀吉の怒りを買い自刃
	8月	秀吉の嫡男・鶴松が死去
	12月	秀吉、甥の秀次に家督と関白職を譲り、以後「太閤」を称する

【2026年 NHK 大河ドラマ】

豊臣兄弟！ 全体相関図と主な登場人物

（枠内下段は演者）



東宮遺跡（ひがしみやいせき）

発掘された江戸時代の村

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
上席調査研究員 黒澤 照弘

❶八ッ場ダム 満水の「八ッ場あがつま湖」

❷やんば天明泥流ミュージアム

はじめに

群馬県には、地中に残る江戸時代の村を発見して、多くの貴重な成果を挙げた遺跡があります。八ッ場ダム建設に伴い発掘された東宮遺跡もその一つです。

東宮遺跡には、山間部の村が当時のままの姿で残されていました。緩斜面を整地した屋敷地には主屋や酒蔵などの建物跡が残り、畑跡は隅々まで広がり、石垣や道、井戸等とともに村人が使っていた数多くの道具類が発見されました。

なぜ地中に埋もれていたのか

なぜ、江戸時代の村は地中に埋もれていたのでしょうか。そこには、浅間山の甚大な火山災害が深く関係していました。天明3年（1783）新暦の8月5日、浅間山は激しく噴火し、その影響で山麓を流れる吾妻川が泥水であふれました。「天明泥流（てんめいでいりゅう）」とも呼ばれる大量の泥流は、吾妻川、利根川へと流れ下り、川の近くにあった村々を埋めていきます。家は流され、畑は埋め尽くされ、多くの方が亡くなる大惨事となりました。それでも、生き残った人々は力強く村を復興していきます。

東宮遺跡で発見されたもの

東宮遺跡には、「村での暮らしぶり」「火山災害と避難する人々」「村の復興」のそれぞれの痕跡が良好に残されていました。

被災前の村人は、毎日畑に出て作物の世話に精を出していました。畑ではアサや、主食となるアワやヒエ、ソバなどの穀物類、キュウリ、カボチャ、ゴボウなどの野菜が栽培されていました。遺跡には、畑の畝がきれいに残されていたことから、アサ等を収穫した後、新たな作物を育てる二毛作が行われていたようです。カイコの繭も発見されましたが、カイコに寄生する寄生虫の蛹も見つかりました。苦労の多い養蚕だったのでしょう。酒蔵には酒を搾る槽場跡もあり、酒造りが行われていました。「天明二年」「酒蔵用」と墨書された刷毛が発見されたことから、酒造りを始めて間もなく被災したことも分かりました。

❸東宮遺跡 発見された酒蔵

❹東宮遺跡 畑跡 畝間の溝には白い軽石が残る

❺発掘調査の様子

❻出土した団扇（うちわ） 被災した8月5日を物語る

❸出土した行灯（あんどん）

井戸から水をくみ、薪を割り、囲炉裏やカマドにヤカンや鉄鍋をかけ、お茶を飲み、アワなどを主食に、梅干しや時にはブリなども食べる。右利きの人が多く、下駄や草履を履き、仕事の合間に煙草を一服する楽しみもありました。道具はとても大切にされ、壊れても修繕して使い続けています。主屋の土間にはウマヤがあり、家畜とともに一つ屋根の下で暮らしていました。家畜は馬と思われますが、馬は荷物を運び、畑を耕す貴重な労働力でしたので、とても大事にされていました。

そんな村の日常は、天明3年8月5日に一変します。それまで噴火の音や振動に驚くことはあっても、村での被害は軽石がうっすら降り積もる程度でした。ですが8月5日、大災害に見舞われたのです。全てを埋め尽くす泥流は目の前にしても現実のことと思えず、泥水で足下が濡れる頃になってはじめて、高いところへと避難した人もいたのでしょう。取るものも取りあえず、裸足で逃げた人もいたようで、主屋の土間には多くの下駄や草履が残されていました。

被害は甚大でしたが、村は復興を果たします。天明泥流は1m前後の厚さで土砂や石を残しましたが、その全てを人力で取り除くことはできません。村人は、厚く残る土砂の上に村を復興しました。ですが、畑には作物を育てるための耕作土が必要です。埋もれている畑の土を掘り起こし、その穴に土砂や石を埋める天地返しが行われました。復旧溝とも呼ばれる痕跡は、数多く確認されています。なかには唐臼など必要な道具を掘り出すために、あるいは行方不明の人を探すために掘られたのかもしれません。

東宮遺跡はダム湖の湖底にあるため訪れることはできませんが、その近くには、同遺跡をはじめ八ッ場ダム建設に伴う発掘調査の成果を展示する施設があります。国道145号線を草津方面へ、八ッ場ダム堤体を過ぎ、道の駅八ッ場ふるさと館からほどなくして、道路の左側に「やんば天明泥流ミュージアム」があります。ここでは、当時の暮らしぶり、天明泥流による甚大な被害や避難の様子、苦労の多かった復興の記憶を伝える展示がされています。歴史を知ることは、将来に備えること、防災や減災を考える上でも貴重な施設です。

参考文献
・群馬県埋蔵文化財調査事業団2011『東宮遺跡（1）-遺構・建築部材編-』
・群馬県埋蔵文化財調査事業団2012『東宮遺跡（2）-遺物編-』
・群馬県埋蔵文化財調査事業団2017『東宮遺跡（3）』
掲載写真は筆者撮影

シリーズ 群馬の芸術家 33

河内世紀一

円の旅路、才能豊かな表現者

美術研究家 染谷 滋

前田常作とジャクソン・ポロック

二冊の本がある。ひとつは『マンダラと巡礼の風景―前田常作の《絵日記》をめぐって―』(新風舎、二〇〇七年)。そして『ジャクソン・ポロック―前衛への軌跡―』(D・iPS・A、二〇一九年)。どちらもしっかりとした資料調査に基づいた一級の美術書だ。

著者は河内世紀一。今回紹介する芸術家だが、芸術家だけにとどまらない側面を持っている。思慮深く、物事を多面的に捉えて判断する学者肌の人物のようでもあるが、計画的な実践を欠かさない行動の人でもある。その一方で、C型肝炎やうつ病や肝臓がんなど、次々と襲う病と闘い続ける戦士の側面も持っている。

このような多面性は前田常作やポロックにも当てはまり、優れた芸術家に見られる共通の資質といえそうだ。

東京大空襲を生き延びて

河内世紀一は戦時中の一九四〇年(昭和十五)十一月十日に東京で生まれた。世紀一という印象的名前は、生まれた日が、当時日本が使用していた皇紀二六〇〇年の記念式典が宮城前広場で開催された日と一致したからだ。新しい世紀に生まれた長男を意味していた。

最初の記憶に刻まれたのは、四歳のときに経験した東京大空襲だった。雑司ヶ谷に住んでいた河内家も被災し、両親と弟とともに火の海の中を逃げ回った。父に背負われ、母は弟を背負った。どこの防空壕も満員で断られたため、逃げるしか道は無かったが、防空壕に入っていたら助からなかっただろう。大勢の人と避難した学校のような建物で、大きなおむすびを食べたことを覚えているという。

住む家を失った家族は、母の生家のある伊勢崎に転居したが、世紀一少年の心の傷はそれから十年の間続いた。現実との一体感がないボーっとした状態だった。中学三年の二学期になって、突然つきものが落ちたように心と体が楽になったという。

美術教師からデザイナーへ

絵は早くから好きだった。伊勢崎工業高校二年のとき、第八回県美術展に入選した記録が残っている。それでも経済的事情から美術学校受験はあきらめ、東京の製薬会社に就職したが、そこでの将来設計に希望が見いだせず、好きな絵の道に活路を開く。

武蔵野美術学校の美術教員養成科を一九六四年(昭和三十九)に卒業して美術教師へ。最初の任地は勢多郡東村(現在のみどり市)の沢入小。三年後に前橋市立荒砥中へ転任し、同僚の中村みよと職場結婚したのが一九七一年九月だった。

そのまま教員生活を続けていれば平穏な人生が待っていたかも知れないが、河内は冒険者の道を選んで一九七三年に退職する。

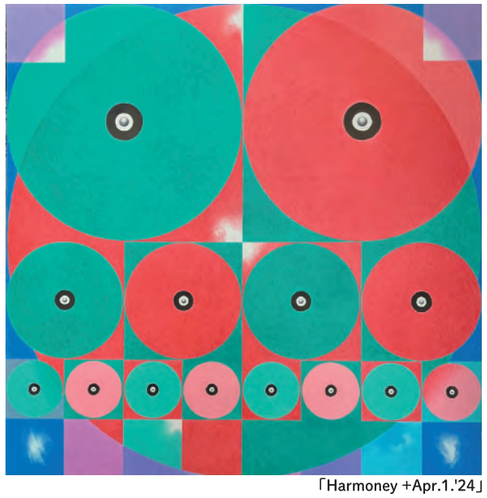
しばらくは広告代理店や印刷会社で働いたが、一九七九年一月、河内デザイン事務所を開設。競争の激しいデザインの世界で生きることになる。

二足のわらじを履いて

デザイナーとしての河内世紀一の仕事を述べるのは私の手に余る。多いときには十名のスタッフを抱えていたというから本格的だ。当時、桐生の有名パチンコメーカーで業界を一変させるヒット商品のデザインを手がけたこともあれば、一九八二〜三年に手がけた伊勢崎のお茶の老舗のギフトセットは、今も地域の人たちに親しまれているブランディングデザインだ。一九八三年四月に東日本ビジネスアカデミーに産業広告学科が新設される際には、学科長として中心的な役割を果たしてもいる。

このようなデザイナーとしての本業を続けながら、芸術家としての制作活動もしばらくは併行して行なっていた。一九七四年に金子英彦らによって前橋で設立された「ぐんまアートセンター」は、作家たちがギャラリーを自主的に運営する画期的な活動で、河内も一九七六年から参加し、毎年個展を行なった。

一九八五年からの十年間、制作活動は中断。デザイナーの仕事が多忙を極めたからだ。その後、どのような心境の変化があったのかは想像するしかないが、一九九五年に十年ぶりの個展を高崎シティギャラリーで開催したときには、事務所の閉鎖を決めていたと思われる。それから数年をかけてスタッフの進路などに気を配り、一九九八年には二十年間続いたデザイン事務所を無事に終了させた。



「Harmoney +Apr.1.'24」

学生からの再スタート

デザイン事務所を閉鎖した年、河内は五十七歳で放送大学に入学する。そこでは「人間の探求」を専攻し、抽象表現主義を代表するジャクソン・ポロックについての研究を行なった。アメリカのポロックのスタジオにまで出かけているから本格的だ。

四年後に放送大学を卒業すると、今度は筑波大学大学院芸術研究科に入学。つくば市にアパートを借り、週末に帰郷する日々を過ごす。二年後の修士論文がマンダラの作品で知られる前田常作だった。

こうして、若いときに断念した学生生活を六年かけてやり直した後、河内は個展活動を再開し、過去の作品の見直しと新作への挑戦を始めた。

しかし、二〇一三年には親友でデザイナー時代の同僚でもあった山田英雄に先立たれ、翌年には最愛の妻をすい臓がんで失う不幸に見舞われ、自身も様々な病気に襲われることになる。

それでも河内の活動は休みなく続き、毎年個展やグループ展で新作を発表している。

河内世紀一の作品は、長年のデザインの仕事で培われた感覚を、手技の実感と即興で練り上げた抽象的なもので、繰り返しや変調などの音楽的な要素を多分に含んでいて、円を基調としつつ音楽の即時性と造形との間を行き来している。私には河内の人生もどこか円の繰り返しのように思える。

略歴 河内世紀一 SEKIKAZU KAWAUCHI

1945 東京大空襲で伊勢崎に転居。
1964 武蔵野美術学校美術教員養成科を卒業。
群馬県内の小中学校で教える。
1968 第2回前橋市民展に初出品し市民展賞受賞。
1973 教員を退職し、広告代理店などでデザインを修業。
1975 第1回フランス美術賞パリ展に出品。
1976 ぐんまアートセンターの活動に参加。(〜1979)
1979 前橋市東片貝町に河内デザイン事務所開設。
1982 東日本ビジネスアカデミーに新設される
産業広告学科長となる。
1986 ART OF TODAY(ハンガリー、ブタペスト)
に出品。(〜1987年)
1990 エイ・アール・コミュニケーション設立に参加し
副社長となる。
1997 上毛新聞オピニオン21第6期委員に選出。
1998 放送大学入学。この年、デザイン事務所を閉じる。
2000 第16回国民文化祭ポスター原画募集で優秀賞。
2002 放送大学を卒業(人間の探究専攻)。
筑波大学大学院芸術研究科入学。
2004 筑波大学大学院芸術研究科修了(総合造形領域)。
2007 『マンダラと巡礼の風景―前田常作の《絵日記》を
めぐって―』出版。
2011 第2回おおたビエンナーレに出品。
2012 第44回欧美スペイン美術賞展に出品。
2014 第46回欧美ポルトガル美術賞展で優秀賞。
2019 『ジャクソン・ポロック―前衛への軌跡―』出版。
2020 第21回日本・フランス現代美術世界展で協賛賞。
このほか、高崎シティ・ギャラリー、登録有形文化財旧花輪小学校記念館、富岡製糸場(西置繭所・多目的ホール)、広瀬川美術館、ノイエス朝日、画廊翠巒などで個展、グループ展多数。

YAMATO TOPICS

埼玉西武ライオンズ

「埼玉西武ライオンズ・ベルーナドームに ヤマトの社名看板を掲示」

当社は株式会社西武ライオンズと2026シーズン スポンサーシップ契約を結び、埼玉西武ライオンズの本拠地であるベルーナドーム（埼玉県所沢市）内に、当社の社名看板が取り付けられました。掲示の位置は、ライト側の下段トラスで、看板のサイズは幅12・5ｍ×高さ2・75ｍです。期間は2026年3月1日から2027年2月28日です。球場を訪れる観客の目にとまり、テレビ放送で映ることもあり、PR効果が期待されます。当社は、西武プリンスホテル&リゾーツ、軽井沢ショッピングセンターをはじめ、西武グループの様々な施設の建築設備工事に携わらせていただいています。（広報室 木下 記）

INTERVIEW

（株）西武ライオンズ 営業部次長 坂本様

群馬県は埼玉県と隣接しており、スポーツが盛んで特に野球好きの方が多いと感じています。群馬県は、北関東エリアへの商圏の拡大、より多くのファンの皆さまや地元の企業さまとの接点創出など、私たちにとって非常に重要な地域です。今シーズンも5月20日（水）に千葉ロッテマリーンズ戦を上毛新聞敷島球場で開催しますが、1996年の初開催から今年で15回目となります。

地元企業のヤマトさまにはシーズンシートや群馬開催でのご協賛など、長きにわたり埼玉西武ライオンズをご支援いただいております。また、今シーズンより本拠地のベルーナドームにも広告を掲出いただき、オフィシャルスポンサー契約という形でさらなるお力添えを賜れますこと大変うれしく思っております。

ベルーナドームはご紹介いただいている通り、2021年3月に大規模な改修工事が完了し、さまざまな座席や大型スクリーン、照明、音響などの試合の演出が大幅にスケールアップしました。また、お子さま向けのエリアや1000種類以上のメニューを揃えたスタジアムグルメなど、観戦のみならず試合前後でも楽しんでいただける球場になっております。また髙橋光成投手、柘植世那選手、蛭間拓哉選手など群馬出身の選手も在籍しています。

ぜひ、社員の皆さま、ご家族、知人などと一緒にベルーナドームに足を運んでいただけたらと思います。

ベルーナドーム

狭山丘陵に位置する自然共生型のドーム球場。1979年から西武ライオンズの本拠地球場として、球史に残る名勝負が繰り広げられました。1999年からドーム球場となり、2021年3月に大規模な改修工事が完了しました。

ドーム内には、バックネット裏最上階にあり、球場内を一望できる「ライオンズ オーナーズレストラン」や、バックネット裏の「アメリカン・エキスプレス プレミアム® ラウンジ」が設置されています。

ベルーナドームの外観

アメリカン・エキスプレス プレミアム® ラウンジ

「アメリカン・エキスプレス プレミアム® ラウンジ」とは、「アメリカン・エキスプレス プレミアムエキサイト®シート」「ブッフェエリア」「バーエリア」の3エリアから構成されています。総収容人数は483人、広さ約1,000㎡。ホームプレートの後方に位置しており、選手を間近に見ることができ、臨場感を楽しめます。

ラウンジ内では食事が楽しめます。ブッフェでは、多彩な料理が用意されています。バーエリアでは豊富な種類のウイスキーなどが用意されています。

室内は空調完備で、200インチのプロジェクターが設置され、中継映像や捕球音・打球音を集音する高性能なサウンドシステムで試合の臨場感などを体験できます。

その他、ライオンズとして日本一になった際に手にしたチャンピオンフラッグの他、歴代ユニフォームが展示されています。

アメリカン・エキスプレス プレミアムエキサイト® シート

アメリカン・エキスプレス プレミアム® ラウンジ

歴代ユニフォーム

チャンピオンフラッグ